

【22用 語】

【先達而…せんだつて】「さきだつて」とも。先ごろ、先日

【植差…うえさし】苗木を植えたり、挿し木をさすこと

【差木…さしき】「挿木」の当て字。花木などの枝を切り取り、地中にさし新株を育てること

【永荒場…えいあれば】「永荒地」とも。災害などで耕作ができず、永い間放置されて年貢の対象からはずされた土地

【廻状…かいじょう】「廻文」「回章」とも書く。領主が村々へ法令や年貢・諸役の徴収など様々な用件を伝達する文書

【奉畏…かしこみたてまつり】「かしこまりたてまつり」とも。ひたすら恐れ入ります。

【間々…まま】あいだ、すきま

【注進…ちゅうしん】事柄を書き記して報告すること、申し述べること

【22解 説】

江戸時代の境町（現、伊勢崎市）は、利根川とその支流広瀬川の北側に位置し、日光例幣使道の柴宿と木崎宿の間宿（あいのしゆく）として栄えたことで知られる。しかし、行政的には例幣使道に沿って佐位郡境町とその東隣りの新田郡境村とに区分されていた。このうち新田郡境村は江戸初期に世良田村、さらに女塚村から分村して成立し、当初は旗本津軽氏の知行地であったが、元禄から文政期の間は幕府の直轄領に編入されている。

本文書は、この境村の名主らが明和六年（一七六九）六月、幕府の代官役所に届け出た桑苗木の植え付け報告である。これによれば、境村では幕府から繰り返し空地や荒れ地を再利用し、苗木などの植え付けを命じられていたが、空地等がなかったため、田畑の間に桑の苗木二七〇本を植え付けたところ、残らず根付いたと報告している。なお、境村では江戸後期から次第に養蚕・製糸・織物業が盛んになり、隣りの境町で取引されたことが知られている。